

2023年度 競技者必携改訂

公益財団法人 全日本軟式野球連盟

頁	現 行	頁	改 正
大会審判員について			
34	1 大会審判員は、毎年登録した全日本軟式野球連盟公認審判員が任にあたる。	42	◎公認審判員に関する規程第2条及び第3条を遵守することを再確認する。 公式試合の審判は、全日本軟式野球連盟に登録された審判員が行う。
●9回戦試合／天皇賜杯、国民体育大会、高松宮賜杯、東・西日本、中部日本、東・西選手権			
●7回戦試合／日本スポーツマスターズ、全日本シニア、国民体育大会順位決定戦			
36	6 ベンチに入れる人員 《9回戦試合》 (1) 登録されユニホームを着用した監督30番を含む選手20名以内  《7回戦試合》 (2) 全日本シニアは、登録されユニホームを着用した監督30番を含む選手20名以内 監督、マネージャー、スコアラー、トレーナーが選手を兼ねる場合には、選手登録をし選手20名以内の範囲とする。	44	6 ベンチに入れる人員 《9回戦試合》 (1) 登録されユニホームを着用した監督30番を含む選手25名以内  《7回試合》 (2) 全日本シニアは、登録されユニホームを着用した監督30番を含む選手25名以内 監督、マネージャー、スコアラー、トレーナーが選手を兼ねる場合には、選手登録をし選手25名以内の範囲とする。
37	8 シートノック (1) 補助員は、ヘルメットを着用すること。	45	8 シートノック (1) <u>ダートサークル内に入る</u> 補助員は、ヘルメットを着用すること。
40	2 延長戦 《7回戦試合》 (1) 延長戦は9回(最長2回)まで、もしくは試合開始後、2時間30分を経過した場合は、新しいイニングに入らない。	48	2 延長戦 《7回戦試合》 <u>7回を完了して同点の場合は、健康維持を考慮し、タイブレーク方式により勝敗を決する。</u>
		50	4 特別継続試合【追記】 ⑥特別継続試合は、全ての事項についてもとの試合を引継ぐ。 (試合時間、タイムの回数制限、警告回数等)

42	6 指名打者の取り扱いについて	50	6 指名打者の取り扱いについて (5.11(a)) 連盟が主催する大会においては、指名打者ルールを使用することができる。(学童、少年部は除く) 《2023年新規》 二刀流について追記
◆少年部、学童部、女子大会 § 1 競技運営に関する注意事項		◆学童部、少年部、女子大会 § 1 競技運営に関する注意事項	
44	6 ベンチに入れる人員 《少年部、学童部、女子中学》 (1) 登録されたユニホームを着用した監督30番、コーチ29番、28番および選手20名以内 《女子学童》	53	6 ベンチに入れる人員 (1) 登録されたユニホームを着用した監督30番、コーチ29番、28番および選手25名以内  《女子学童》 削除
45	7 打順表(登録された選手全員を記入したもの)の提出は、 (3)《学童、女子共》第2試合以降は前の試合の2回終了時までに	53	7 打順表(登録された選手全員を記入したもの)の提出は、 (3)《学童、女子共》第2試合以降は前の試合の3回終了時に
45	8 シートノック (1) 補助員としてコーチ(背番号29・28)を認める。補助員はヘルメットを着用すること。なお1人のブルペン捕手を、試合開始前までの間許可する。(マスクを着用すること)	53	8 シートノック (1) 補助員としてコーチ(背番号29・28)を認める。 <u>ダートサークル内に入る補助員はヘルメットを着用すること。なお、コーチ1人のブルペン捕手を、試合開始前までの間許可する。(マスクを着用すること)</u>
46	13 打者が頭部にヒット・バイ・ピッチを受けたときには、球審は攻撃側の監督と協議し臨時代走の処置を行うことができる。	55	13 打者が頭部にヒット・バイ・ピッチを受けたときには、 <u>その程度を問わず臨時代走の処置を行う。</u> <u>臨時代走は、試合に出ている9人の中から代走(打順の前位の者、ただし投手を除く)を認めて試合を進行する。</u> <u>臨時代走の役割は、アウトになるか、得点するか、またはイニングが終了するまで継続する。(規則5.10e【原注】関連)</u>
§ 2 競技に関する連盟特別規則 《学童部(女子共)》			
50	7 学童部の投球数制限について 【学童部(女子共)】 ①1日の投球数は70球以内(4年生以下は60球以内)	59	7 学童部の投球数制限について 【学童部(女子共)】 ①1試合かつ1日の投球数は70球以内。 <u>なお、4年生以下が投手として</u>

			出場した場合の投球数制限は学年で判断する。(4年生以下は60球以内)
51	9 試合時間の管理について	60	9 試合時間の管理について 【補足】 学童部(女子共)の試合においては、プレーヤー等の負傷手当のための遅延は試合時間に参入しない。 *放送(審判員から通知)があったときから計時を止め、放送(審判員から通知)があったときから計時を再開とする。
◇各大会共通			
§3 試合中の禁止事項			
58	11 試合が開始されたら、控え選手は試合に出場する準備(交代選手のキャッチボール)をしている者の他は、ベンチ内にいなければならない。ただし、攻守交代時に限り、控え選手がファウルグラウンドで外野の方向へランニングすることを認める。	67	11 試合が開始されたら、控え選手は試合に出場する準備(交代選手のキャッチボール)をしている者の他は、ベンチ内にいなければならない。ただし、攻守交代時に限り、控え選手がファウルグラウンドで外野の方向へランニングすることを認めるが、控え選手がベンチを出て守備練習を見守ることおよび、投手の準備投球に合わせて素振りすることを禁止する。 (5.10(k))
58	13 塁上の走者、あるいはコーチスボックスやベンチから守備側(捕手)のサインを盗み、それを打者に伝達することを禁止する。	67	13 塁上の走者、あるいはコーチスボックスやベンチから守備側(捕手)のサインを盗み、それを打者に伝達することを禁止する。 また、打者が投げ終わった球種を次打者他に知らせることを禁止する。
競技者のマナーに関する事項			
62	9 投手が投球動作を開始したら、投手の動揺を誘うような声を発しない。	71	9 投手が投手板に触れて投球位置についたら、投手の動揺を誘うような大きな声を発しないこと。
		71	【新規】 10 学童部、少年部の試合において、ベンチ内の大人がいかなる状況であっても、選手を委縮させるような言動を禁止する。
用具・装具に関する事項			
63	1 試合に出場する捕手は、安全のためプロテクター、レガース、マスク(スロートガード付)、捕手用ヘルメット、ファールカップを着用すること。	72	1 試合に出場する捕手は、安全のためプロテクター、レガース、マスク(スロートガード付)、捕手用ヘルメット、ファールカップを着用すること。なお、攻守交代等に伴い捕手が用具着用中に、控えの捕手等が準備投球を捕球する際は、捕手に求められる用具をすべて着用していない限り、

			<p><u>立って捕球すること。</u></p> <p>*主に学童部での捕手(控え捕手)の代わりにコーチが準備投球を捕球することは認めていない。シートノック時ではコーチ1名のブルペン捕手を、試合開始前までの間許可する。(マスクを着用すること)</p>
63	3 サングラスは、大会本部の承認なしに使用できる。ただし、投手は使用できない。	72	3 サングラスは、大会本部の承認なしに使用できる。 <u>ただし、投手はミラーレンズサングラスの使用はできない。また、野手がサングラスを帽子の底の上に乗せることを認める。</u>
63	4 ネックウォーマーは、季節を考慮し着用することができる。	72	4 ネックウォーマーは、季節を考慮し着用することができる。 *投手・野手関係なく使用することが可能である。
64	8 バットは改造、加工したものは使用できない。	73	8 バットは改造、加工したものは使用できない。 <u>ただし、後付けのフレアグリップの使用については、専用テープ等で完全に固定・被覆されたならかな形状のものであれば使用は認める。</u>
規則適用上の解釈			
66	(5) 走者が野手の触球を避けた場合において(規則 5.09b(1)) 走者の現在地と塁を結ぶ直線の左右の各3フィートが走者の走路とみなされる。したがって、走者が触球を避けて3フィート以上遠ざかればラインアウトが宣告される。	75	(5) 走者が野手の触球を避けた場合において(規則 5.09b(1)) 走者が野手の触球を避けて、タッグプレイが生じた時の、走者と塁を結ぶ直線のベースパス(走路)から3フィート以上離れて走った場合、その走者にアウトが宣告される。(ラインアウトでアウト)・・・
76	(40) 投手が自由な足を踏み出さないで、対面する塁にけん制球を投げる場合は、軸足をはずした後に両手を離さなければならない。軸足をはずすのと、両手を離すのが同時の場合はボークとなる。(5.07a(2)【注5】)	85	(40) 投手が自由な足を踏み出さないで、対面する塁にけん制球を投げる場合は、軸足を投手板の後方にははずした後に両手を離さなければならない。軸足をはずすのと、両手を離すのが同時の場合はボークとなる。 (5.07a(2)【注5】)
質疑応答・5.00 試合の進行			
106	42【問】	116	42【問】 規則に合致するよう見直した
114	72【問】	124	72【問】 規則に合致するよう見直した
審判上の取り決め事項ならびに注意すべき規則			
214	7 故意落球 容易に捕球できるはずのフライまたはライナーを、内野手が片手または両手で現実に打球に触れてから、併殺を企てるため故意に落としたものが故	224	7 故意落球 容易に捕球できるはずのフライまたはライナーを、 <u>内野手および外野手が内野近くまで来て、片手または両手で現実に打球に触れてから、併殺を企</u>

<p>意落球であり、ボールデッドとなる。しかし、手またはグラブに触れないで落としたものは故意落球とはならず、ボールインプレイである。</p>	<p>てるため故意に落としたものが故意落球であり、ボールデッドとなる。しかし、手またはグラブに触れないで落としたものは故意落球とはならず、ボールインプレイである。</p>
--	---